マンション外装デザインに関する実態調査

匿名建築物におけるデザインの展開に関する研究

AN INVESTIGATION INTO THE ACTUAL CONDITIONS OF EXTERIOR DESIGN IN APARTMENT BUILDINGS

A study on anonymous architecture design

徳田 光弘*, 片野 博**
Mitsuhiro TOKUDA and Hiroshi KATANO

Up until now, urban landscape formation by ordinary architecture has not been studied thoroughly. Our purpose is to clear up the present conditions and the change of eras in exterior design. So we conducted a comprehensive survey of existing apartment buildings in a certain urban landscape. In the result, we notice that in the second half of the 1980's the exterior design of apartment buildings went into a big change: From low cost and simple design to high cost and decorative design. That was due to the influence of the increase of the economy on the design style. After that period, although the economy decreased, the same design style did not disappear. It is because present-day designers are skilled in getting the same design by using low cost methods.

Keywords : *Apartment Buildings, Exterior Design, Survey, Anonymous Architecture*
マンション, 外装デザイン, 実地調査, 匿名建築物

1. はじめに

1-1. 研究の背景

現在、建築設計業務に携わる事務所は多数存在し、地場に密着した形で設計活動を行っている。つまり、市街地を形成する主たる建築物のほとんどが地場型建築設計事務所（以下、特別な場合を除いて事務所と略す。）によって手掛けられているといえよう¹⁾。そのような現状にも関わらず、既往の研究にあつては著名な建築物や建築家に関する論述はなされているが、「市街地を形成する一般建築物」という見方では著名建築物はむしろ例外的なものであり、主として市街地を形成する、いわば匿名建築物に関する論述は極めて少ない。また、近年景観改善策として町並みに同化するという観点のもと法的規制、誘導手法²⁾が成果をあげているが、実際に設計を行うのは事務所であり、それらは設計業務の一端を抑制しているにしか過ぎない。よって、景観の改善の根本的な糸口はむしろ事務所にあり、設計者によるデザインの实態を知ることが今後の新たな市街地景観の改善策を導き出す手がかりになるといえる。よって著者らは、福岡県下を事例としてあげ、事務所の経営形態と地域特性をマクロデータの分析という手法によって明らかにしてきた³⁾。また、市街地を形成する建築物の中でも主要素といえるマンション（中高層耐火集合住宅）⁴⁾の外装デザインを研究対象とし、事務所にヒヤリング調査・アンケート調査を実施することによって、地場の設計者

のデザイン決定に関する諸事情及び外装デザインに対する意識を明らかにすることを試みてきた⁵⁾。

1-2. 本研究の目的と位置付け

これら事前研究を踏まえ本研究から、より実践的な設計業務という観点のもと、引き続きマンションの外装デザインを研究対象に、現存するマンションの実態調査によって外装デザインの現状、時代変化を明らかにしていく。特に本稿では、法的規制・コスト・消費者の嗜好など様々な要因から決定された後、結果的に市街地の景観を形成するに至る、最終的にアウトプットされたデザインに関しての現状を解明していくことに主眼を置いている。これは、設計者によってなされる各外装部におけるデザインが、どのような要因を経て決定されていくのかを探っていく上で、また新たな景観改善策を模索していく上で重要と思われる。また本研究は、前述したヒヤリング・アンケート調査を主体とした前回の研究を進めたもので、前稿と同様に外装デザインを「外装部を構成する主要素」である「玄関部」、「バルコニー部」、「壁面部」、「屋根部」、「色彩」に分けた⁶⁾。そして、それら各外装部の形態・形状などを調査結果をもとに分類化し、デザインの時代変化とそれらの関連性について分析した。

なお本稿は、外装デザインを取り扱うものでファサードに関する研究に類し、この領域では様々な観点から論じられてきた⁷⁾。これら既往研究にほぼ共通することは、知名度の高い建築物について取

* 九州芸術工科大学大学院生活環境専攻 修士(芸術工学)

** 九州芸術工科大学環境設計学科 教授・工博

Graduate Student of Kyushu Institute of Design, M. Design

Prof., Dept. of Environmental Design, Kyushu Institute of Design, Dr. Eng.

り扱っているという点であり、対極にある知名度の低い、いわば無名建築物を対象としたことが、本研究の根幹的な独自性である。

2. 研究の方法

本研究は、現存のマンションの外装デザインについての実地調査結果から、調査対象のマンションの外装デザインの時代による変化、動向を指し示すものである。

2-1. 調査対象

実地調査の対象地区は、福岡市の南区に位置し、昭和47年から15年にわたり土地区画整理事業地区として採用され開発が行われた「塩原地区⁹⁾」とした(面積:1,539,191平方メートル)。

選定理由は、以下のとおりである。

- 1) 福岡都市から約4キロと近く、西鉄大牟田線の急行停車駅である大橋駅を中心とする中高層住宅の立地性を強く持つ地区であり、用途地域において「第一種、第二種住居地域」が大部分を占め、研究対象であるマンションが数多く存在すること。
- 2) 「市街地開発事業地区」に指定されており、「市街地を形成する主たる建築物」を取り扱う本稿に適していること。
- 3) 区画整理事業により新しい都市基盤(街路)が整備された地区であり特異な歴史性や地域性を持たないことから、デザインに地区独自の性質を持つ可能性が低く、いわゆる一般性が高い「匿名建築物」に着目した本稿に妥当な対象といえること。

調査対象は、この地区内の全326件(1999年4月現在)のマンションであり、抽出調査では恣意的でサンプルの傾向が偏る恐れがあるため、全体としての実態を明確に捉えることができる悉皆とした。なお、調査対象地区である塩原地区の概略地図を下図に示した。

2-2. 調査方法

実地調査は、1998年10月、1999年4月、2000年4月に実施したもので各マンションに赴き、名称・所在地・階数・戸数・建設年代等の属性を調べ、建築デザインに関するデータとして写真撮影(一件あたり3~5枚程度)・記録を行った。また建設年代が不明であっ

たマンションが大半を占め、これらについては住宅地図⁹⁾の出版年代を参考とした。

3. 時系列による各部デザイン動向

まず、マンションの外装デザインを形成する主要な4要素(玄関部、バルコニー部、屋根部、壁面部)に関して時系列グラフ(図-1~7)を主体に、事務所に対するヒヤリング調査の結果を踏まえ、各部の時代によるデザインの変化を分析する¹⁰⁾。また、「2-2.調査方法」でも述べたように大半のマンションの建築年代は住宅地図への出現年代でしか調べることができず、住宅地図自体も89年以降定期的に出版されるものの、それ以前は不規則に出版されていた。そのため、本項の時系列グラフの各年代間隔には2年間から5年間までの開きがあり、年代毎の数値の規律性に乏しい。しかし、時代を通しての大局的な外装デザインの変化は捉えることが可能といえる。よって本項では、年代間の等価な数量的判断を極力避け、主眼を各外装箇所のデザイン動向に置いている。なお、年代毎の件数、比率は右図に示した。

年代	件数	(%)
78年以前	15	4.6
78~83年	76	23.3
83~86年	50	15.3
86~89年	78	23.9
89~91年	42	12.9
91~93年	17	5.2
93~95年	20	6.1
95年以降	28	8.6
	326	100.0

3-1. 玄関部

実地調査から玄関部の形態は、建物本体と独立して門の形状をもつ「ゲート型(写真-1参照)」、玄関上部に片持梁で庇を設けている「庇型」、庇の端部に柱を配し法式的にはピロティとして扱われる「ポーチ型(写真-2参照)」、それらに属さない「その他」、玄関部分にデザインが施されていない「該当なし」に分けられ、時代毎の形態変化を分析した図-1の結果が得られた。まず図を見て明らかなのは、玄関に独自のデザインが付加されていない、つまり「該当なし」が、80年代前半まで減少傾向ながら半数弱の高

写真-1. ゲート型

写真-2. ポーチ型

図-1. 玄関部形態における各形状の時代変化

い値を示していたが、80年代中盤から「ゲート型」、「ポーチ型」に類する形態の普及に伴い、急速に減少していき、90年代以降は約1割に留まっていることである。一方、上昇傾向にあるのが「ポーチ型」であり、80年代中盤から出現し始め、急速にポーチに類するデザインの普及がすすみ、「91～93年」には最大値52.9%と過半数を超え、その後減少するものの約3割が「ポーチ型」に類するデザインを採用している。また増減はあるものの（最大で「83～86年」の24.0%、最小で「89～91年」の9.5%）70年代から90年代にかけて一定の割合で採用されているのが「庇型」である。実地調査により年代が新しくなるにつれ玄関形状が多様多様になっていくことが推測できたが、ヒヤリング調査の結果から「庇型」の利点である大きな面積を必要としない、比較的ローコストで抑えることが可能であるなどの理由により、採用され易い要因になっていることが推測できる。「ゲート型」に類する形態は、「ポーチ型」より幾分早く普及しはじめたが、「89～91年」の21.4%を境に下降しはじめ、近年ではほとんど見られなくなっている。これについて、ヒヤリング調査の結果としても得られたが「ポーチ型」、「庇型」のもつ雨天時における雨よけ等という用途に対し、「ゲート型」がその機能をもっておらず、「庇型」と「ゲート型」の性質を合わせもった「ポーチ型」に変更されたことが考えられる。

玄関部の急激なデザイン変化はまず、「該当なし」が急速に減少していった、つまり玄関部に独自のデザインを付加価値として使用する手法が定着していった80年代中盤から後半にある。それは、「ポーチ型」がある程度の面積を必要とし、売却・貸借時の坪単価を上げるというデメリットを持っているにも関わらず、デザイン手法として普及していったことから窺える。その原因として、事前研究や今回のヒヤリング調査における設計者の回答で多数得られた消費者やディベロッパーや施主などからの玄関部に対する「高級感」の要望が強くなってきているということがあげられ、「ポーチ型」が要望に対応するデザインとして確立したことが推測できた。

3-2. バルコニー部

ここではバルコニー部における躯体形状¹⁴⁾を「直面型」、「曲面型」、「凹凸型」、「手摺部のみ」に分類し時代変化について考察する。また、バルコニー部を構成する主要素のひとつである手摺部（バルコニー部における躯体以外の箇所金属等で作られた柵状の部分を指す。）の形状の時代変化について、調査結果から手摺部を「アルミ製縦格子」、「鉄製縦格子」、「メッシュ」、「鋳物風装飾」、「すりガラス」、「不燃ボード」に、それら躯体形状と手摺部のバルコニーを構成する関係を、躯体のみで構成された「躯体型」、躯体と手摺の双方で構成された「躯体+手摺型」、躯体部を有していない「手摺型」に分類し、時代によるバルコニーのデザインの移り変わりを分析する。

3-2-1. バルコニー躯体形状について

まず躯体形状について調査結果により図-2が得られた。バルコニー躯体表面に凹凸を設けない「直面型」が70年代から90年代まで約半数を占め、この時期を通してバルコニー躯体におけるデザインの主流になっていることがわかる。概ね均一なファサードを形成する「直面型」に対し、凹凸をつけファサードに変化をもたらす「凹凸型」は、70年代後半から80年代前半にデザイン手法として確立していったことがわかり、以降3割前後のマンションが凹凸を設け

ている。また調査結果により、凹凸部を直角ではなく斜めに突出させるデザイン手法が計32件見受けられたため、「凹凸型」を「凹凸型（斜）」と「凹凸型（直）」に細分類した（写真-3,4参照）。図-2より80年代中盤以降は、「凹凸型（直）」が大多数を占めるが、それ以前は「凹凸型（斜）」のデザイン手法が多く使用されていたことがわかり（「83～86年」では18.0%と「凹凸型（直）」を大きく上回る結果となった。）、バルコニー壁面に斜めを用いたデザインがバルコニーの躯体形状を決定する上での一選択肢になっていたことが推測できる。また、躯体にカーブを設けた「曲面型（写真-5参照）」は、80年頃から緩やかに普及していき90年前後には「直面型」と並んで主要なデザイン手法として用いられていると考えられる。その後は減少傾向にあり、「曲面型」という手法が90年頃にひとつのピークを迎えていたと思われる¹⁵⁾。特に設計時における「直面型」と「凹凸型」の両者の採用要因は、採光斜線、窓先空地の確保など法的な制約に左右されやすく、選択の自由度が少ないことが設計者の回答で多数得られたが、ファサードが均一で平坦になりがちであり、バルコニーに凹凸をつけることでファサードに変化をつける効果として積極的に用いるという回答も得られた。

3-2-2. バルコニー手摺部について

次に手摺部の形状について、図-3の結果からわかるように、70年代中盤頃までは「鉄製縦格子」が大半であったが、70年代後半より「アルミ製縦格子」が主流になっている。しかし、「80年代中盤から出現してきた「鋳物風装飾（鉄を用いたマンションが全件中1件であり、他はアルミ製であった。）」が90年前後には「アルミ製縦格子」を抜き、「鉄製縦格子」から「アルミ製縦格子」、そして「鋳物風装飾」という順序でバルコニー手摺部の主流が移行していった可能性

写真-3. 凹凸型（直）

写真-4. 凹凸型（斜）

写真-5. 曲面型

図-2. バルコニー躯体における各形状の時代変化

図-3. バルコニー手摺部における各形状の時代変化

が高い。ヒヤリング調査の結果も踏まえ、鉄製からアルミ製へ格子が移行した要因は、材の防錆や軽量化などといった作業上、維持管理上のメリットを踏まえた素材の向上に起因すると考えられるが、「鋳物風装飾」への移行は前者のような素材の違いがなく、ヒヤリング調査から消費者の「高級感」の要求が結果として「鋳物風装飾」が採用されやすい要因になっているとの回答が多数得られた。また、「鋳物風装飾」には劣るものの同時期に出現して一定の割合で使用されている「メッシュ（パンチングメタルも含む）」、少数ながら年代を通して使用されている「すりガラス」も含めて、「鋳物風装飾」と同様に「高級感」などといった意匠的效果を狙うことの他に、消費者のプライバシー確保という要望に対応し透視性の高い「アルミ製縦格子」等を避けることが採用理由になっているという結果が得られた¹³⁾。

3-2-3. 躯体形状と手摺部の構成について

以上、躯体形状と手摺部の時代変化を考察したが、それらのバルコニーを構成する上での相互の関係性の時代変化を示したのが図-4である。躯体のみで手摺部を有さない「躯体型（写真-6参照）」は、約2～4割の間にあるものの年代を通して一定の割合で採用されている。一方、手摺部のみでバルコニーを構成した「手摺型（写真-7参照）」

写真-6. 躯体型

写真-7. 手摺型

図-4. バルコニーにおける躯体形状と手摺部の構成

は、「78年以前」は約半数が該当していたが70年代後半から急激に減少していき、80年代以降極く少数のマンションが採用するにすぎない。「躯体+手摺型」は「手摺型」の急激な減少から時代的変動は見られない。しかし、調査や前項のグラフ（図-3）により、単調でバルコニー全体に対し占める割合が比較的高かった「鉄製・アルミ製縦格子」から、主に躯体主体でスリット状に切り欠いた部分に用いられる「鋳物風装飾」や「メッシュ」などに手摺部が移行しているため、全般的にバルコニーの躯体と手摺の構成は「手摺主体から躯体主体」へ移行変わっているといえる。本項においても前項の要因であげられた消費者の「高級感」、プライバシー確保の要望に対応していったことがデザイン変化の一要因として考えられる。

3-3. 屋根部

屋根形状は「陸屋根」、「傾斜屋根（写真-8参照）」、「アーチ型屋根（写真-9参照）」に分けられたが、調査結果より「陸屋根」に分類されるものの屋根縁部を斜めにカットした特殊な形状をデザインとして用いた物件が全件中59件と多数あったため、独立して「傾斜パラペット（写真-10,11参照）」と称しひとつのカテゴリーとして扱い、その時代変化を探った。（法的規制によるもの、つまり斜線制限等の規制によりパラペット部を斜めにカットしていると推測できるものは含めていない。）

調査結果からは（図-5参照）、「陸屋根」、体系的にそれに含まれる「傾斜パラペット」、つまりフラット形状の屋根のみの手法から、「傾斜屋根」、「アーチ型屋根」の浸透といった時代変化がわかる。「傾斜屋根」、件数は減るものの「アーチ型屋根」といった従来のフラット形状の屋根に付加価値として採用されるデザインは、80年代中盤まで極少数で寧ろ例外的に採用されていたが、80年代中盤以降急激

写真-8. 傾斜屋根

写真-9. アーチ型屋根 写真-10,11. 傾斜パラペット

図-5. 屋根部における各形状の時代変化

に件数を伸ばし、90年代頃からは半数の物件が屋根部のデザインとして傾斜・アーチ型を採用しており、マンションの屋根形状決定の選択肢のひとつとして設計者に定着しているといえる。「陸屋根(傾斜パラベットを含む。)」は80年代中盤以降の「傾斜屋根」の普及に押される形で減少しているが、依然として半数以上のマンションで採用され、設計者より採用理由として「傾斜屋根」にする必要性がないこと、コスト上もっとも効率的な手法であることが多数の回答として上げられた。パラベット部の外観を斜めにした「傾斜パラベット」は、80年代中盤まで約3割のマンションに見られ、ひとつのデザイン手法として確立していたことがわかる。「傾斜屋根」などの普及と交差しているため、また「陸屋根」が年代を通してほぼ一定の値を示していることから、結果的に縁部のみならず全体の形状を変化させる「傾斜屋根」「アーチ型屋根」に手法が切り替わっていったことが考えられる。

3-4. 壁面部

壁面はマンション外装の全体を形成し、最も外観を左右する箇所といえる。特に近年では壁面の外装仕上げが以前の吹付主体の壁面からタイルを使用するケースに移行していった。よって、壁面を構成する上で主要になるタイル及びその色彩に着目し、それらの時代変化と相互の関連性について分析する。

3-4-1. タイル使用面積について

まず全壁面に対するタイル使用面積を、タイルのみを使用している「全面タイル型」、バルコニーが主体となった壁面やコーナーに吹き付けを用いる「部分吹付型」、主要街路に面する立面のみにタイルを用いる「ファサードタイル型」、ワンポイント的な装飾としてタイルを活用する「部分タイル型」、吹き付けにより外装を仕上げる「吹付型」に分類し、マンション外壁仕上げにおけるタイル使用の定着過程を考察する。

図-6から、タイルを外装仕上げとして使用していない「吹付型」は、減少していき80年代中盤は該当する物件は1割に満たない。タイルを一部分に装飾的效果として使用する「部分タイル型」も減少傾向にあり、外装仕上げの主体を吹付とした「吹付型」と「部分タイル型」は減少傾向にあることがわかる。一方、外装仕上げの大部分をタイルとした「全面タイル型」、「部分吹付型」は、80年代中盤以降に急増し、90年代には約8割のマンションがこれらに該当している。特に80年代中盤に普及したのが「全面タイル型」であり、「部分吹付型」との割合を比較してもその急速な増加がわかる。90年頃から安定しはじめ、90年前後に「全面タイル型」にやや遅れをとる形で「部分吹付型」が増加し、以降「全面タイル型」を抑え4～5割程度のマンションがタイルを主体に部分的に吹付を採用する「部分吹付型」を採用しており主流になっている。この結果から、吹付とタイルを対極として「吹付からタイル」という時代変化の構図¹⁴⁾は大凡成り立つものの、タイル使用の手法として「部分タイルから全面タイル」という構図は成立しないといえる。それは、図-6から近年「全面タイル型」より「部分吹付型」のマンションが多数見られること、「ファサードタイル型」が年代を通して、ほぼ一定の割合で採用されていることから窺える。この現象は、ヒヤリング調査において、ほぼ全件の事務所の回答として得られた、近年コスト削減案の最有力候補にタイル枚数の減少、タイル役物の不使用がある、

という結果が主な要因としてあげられる¹⁵⁾。

3-4-2. タイルの色彩について

次に使用タイルの色彩について「濃茶色系」、「薄茶色系」、「白色」、「グレー色系」、「その他」に分類し、図-7の結果が得られた¹⁶⁾。

年代を通して最も使用されるタイル色彩が「薄茶色系」であり、近年では約7割がベージュ系、もしくは通称「アースカラー」といわれる色味をタイルカラーとして採用していることがわかる。「薄茶色系」が台頭する90年以前に主として採用されていたのが「濃茶色系」であり80年代前半まで5割程度のマンションが該当し、最も使用されている色といえる。以降は減少し、90年代にはほとんど使用されなくなっている。近年上昇傾向にあるといえるが該当件数は依然として少数である。また「白色」は、「濃茶色系」から「薄茶色系」に色彩の主流が移動していく過程で増加していき、80年代後半には茶色系について約3割のマンションが採用している。90年代に減少し近年では殆ど見られないが「白色」使用のひとつのピークがあったことは否めない。また90年頃に出現してきた「グレー色系」は少数ながら90年代以降約2割のマンションが該当し、タイル選択

図-6. タイル使用面積の時代変化

図-7. タイル色彩の時代変化

の一ジャンルとして確立しつつあることが推測できる。全般的な時代によるデザイン変化として、「濃茶系色」から「薄茶系色」への主流の移り変わりはもちろんのこと、移行時に大きな分流をつくった「白色」、「白色」と入れ替わる形で表れた「グレー系色」、といった時代変化の構図が推測できる¹⁷⁾。

3-4-3. タイル使用面積と色彩の関係性について

以上、これらタイル面積とタイル色彩の関係を示したのが本頁の図-8である。「吹付型」を除く276件中最も多く見られた組み合わせが「薄茶系色」×「部分吹付」(13.8%)であり、全般的に「薄茶系色」との組み合わせが高率を示した。しかし「部分タイル型」に限り0.4%と全組み合わせの中でも最も低く、「薄茶系色」が「部分タイル型」では用いられ難いことがわかる。また「部分吹付型」の該当件数が全体の32.0%と最も多いにも関わらず、「白色」が採用されたマンションは「全面タイル型」であるケースが多い。一方、タイル面積から見ると、タイル面積に関係なく「薄茶系色」が最も多いことがわかるが、「部分タイル型」に限り、この型の該当例の殆どが「濃茶系色」であるといえる。

3-5. 小結

以上の結果を総括して着目できる点は、これら一連の変化が80年代、特に中盤以降に多く見られることである。もちろん、先にも述べたように年代区分を一律にすることが不可能であったため、年代間で等価に判断することは難しいが、少なくとも80年代中盤から後半にかけマンション外装におけるデザイン手法が大きな変革期を迎えたといえる。それは屋根部における「傾斜屋根」を採用する物件の急激な増加や、外壁タイルにおける「全面タイル型」の急増に代表される。それらにやや遅れをとる形ではあるが、玄関部における「ポーチ型」、バルコニー躯体形状における「曲面型」や屋根部の「アーチ型屋根」といったデザインに曲線を用いたものなども80年後半に増加していったデザイン手法である。一方で「凹凸型(斜)」や「傾斜パラベット」といった斜線を活用したデザイン手法も80年代中盤以降に激減しており、以上を加味してもこの時期に外装デザイン全体が急激な変化を遂げたことが推測できる。

4. 各外装要素間の関係

前項までで、各外装箇所の形態・形状等の時代変化の推移を明らかにしてきた。本項では、時系列グラフによって得られた結果を踏まえ、それらの各外装部の相互の関係性について各外装形状のクロス集計により分析する。

図-8. タイル面積とタイル色彩の関係性 (クロス集計グラフ)

4-1. クロス集計結果の概説

集計した結果、すべてのパターンを網羅した図-9が得られた。以下でそれぞれの組につき概説する。

・組み合わせくA> (玄関形状×バルコニー躯体形状)

「該当なし」、つまり玄関部に独自のデザインを施していないものと「直面型」の組み合わせが最も多いが、新しく普及してきた「曲面型」が採用された場合「ポーチ型」であるケースが多いこと、「凹凸型(斜)」や「手摺部のみ」は「底型」か「該当なし」と併用されやすいことがわかる。

・組み合わせくB> (玄関形状×バルコニー手摺部)

「アルミ製縦格子」と「該当なし」、もしくは「底型」の組み合わせが多数で、続いて「鉄製縦格子」×「該当なし」であり、比較的単純なデザインのもの同士の組み合わせが多く、他は少数でほぼ一定である。しかし、玄関形状が「ポーチ型」の場合は、「鋳物風装飾」が採用されやすい傾向にあるといえる。

・組み合わせくC> (玄関形状×屋根形状)

屋根形状が「傾斜パラベット」の場合、玄関は「底型」「該当なし」に限定され、「傾斜屋根」の場合には各玄関形状はほぼ一定量でありどのような形状も考えられる。全般的に先に述べた図-5においても数多く見られた「陸屋根」との組み合わせが多く「陸屋根」×「該当なし」が最大値を示した。

・組み合わせくD> (玄関形状×タイル使用面積)

タイル使用面積の少ない「部分タイル型」または使用しない「吹付型」では、玄関形状が「該当なし」か「底型」に限られている。言い換えると玄関形状が「ゲート型」「ポーチ型」の場合、タイル使用面積は「ファサードタイル型」以上である可能性が高く、特に「ポーチ型」×「部分吹付型」が多い該当件数を得た。

・組み合わせくE> (玄関形状×タイル色彩)

タイル色彩が「濃茶系色」では玄関形状が「底型」「該当なし」に、「グレー系色」の場合は「ポーチ型」にほぼ限定される。一方、玄関形状が「ゲート型」の場合では、色彩は「薄茶系色」「白色」であるケースが多い。全般的に前述した両者の時系列グラフによる時代変化に準じる結果となった。

・組み合わせくF> (バルコニー躯体形状×屋根形状)

両者の最も基本的な形状といえる「直面型」と「陸屋根」の組み合わせが突出しており、その採用頻度の高さを示している。また、「凹凸型(斜)」や「手摺部のみ」といった古いデザイン手法はほぼ「陸屋根」「傾斜パラベット」の場合においてしか見られなかった。

・組み合わせくG> (バルコニー躯体形状×タイル使用面積)

バルコニーの躯体形状が「直面型」との組み合わせが主流であるが、他に「凹凸型(直)」である場合、タイル面積はタイルを主たる外装仕上げとした「ファサードタイル型」「部分吹付型」「全面タイル型」である可能性が高く、特に「部分吹付型」との組み合わせが高い値を示した。また、壁面仕上げが「吹付型」である場合にバルコニー躯体形状は「直面型」「手摺部のみ」に限定されやすい。

・組み合わせくH> (バルコニー躯体形状×タイル色彩)

ここでも全般的に「直面型」との組み合わせが高い値を示したが、「薄茶系色」の場合においては、「凹凸型(直)」であるケースも多い。また、「曲面型」を採用したマンションはタイル色彩は「薄茶系

右するという結果にも裏付けられた。また、本稿では80年代中盤以降に外装デザインの大きな変革期を迎え、古いデザイン手法から新しく多様化したデザインへ移行していったことが考察として上げられた。これらにより、バブル全盛期という経済的に豊かな時期により、マンションの外装部における様々な付加したデザインの普及が容易になったことが推測できる。それは80年代後半の「傾斜屋根」や「全面タイル型」の急激な普及という結果に顕著に表れている。しかし、この時期に普及していった形状は、バブル崩壊以降も引き続き採用されている。これは近年でもバブル期に出現した「ポーチ型」や「傾斜屋根」などといった新しいデザイン手法が採用されやすい傾向にあることから窺える。このことから、好景気などの要因により一度出現したデザイン手法は、不景気になっても容易に衰退しないという結果が導き出せる。但し、バブル崩壊後、コストを抑えなければならなくなったのは確実といえ、同じデザイン手法でも不必要な部分の削除や質の低下など、設計者がデザイン手法を熟練することによってコスト削減法を身に付けていったことが予想される。タイル使用面積における「全面タイル型」を抑える形で「部分吹付型」が増加していることなどはそれらの要因によるものではなかろうか。

6. 今後の課題

本研究では、匿名性の高い建築物に着目し、ひとつの市街地に現存するマンション全326件を悉皆で調査し、外装部の4つの要素に分けその時代変化を明らかにしてきた。しかし、本稿では現状における外装デザインの時代変化・傾向の要因について定量的に分析するには至らなかった。次の段階として、法的な規制や消費者の嗜好、維持管理面、使い勝手など外装デザインの採用要因となり得る項目について定量的に分析を行っていくことが重要といえる。また、マンションは未だ数多く建設されており、今後の外装デザインの動向も追っていく必要がある。なお、本稿では福岡市のマンションを対象に外装デザインの実態や時代変化について考察したが、今後はこの結果が全国的な可否かも検証する必要がある。

<注釈>

- 1) 本稿注釈3)の論文において、福岡県下の地場型建築設計事務所が地場を中心に設計業務を行っていることが明らかになり、福岡市下の一級建築士事務所総数も1660件と多数存在し、建築業界に多大な影響を与えていると判断できる。
- 2) 例えば、「建設省建築研究所：建築研究報告 第136号 建築物の規制・誘導手法による市街地景観形成に関する調査研究」では、市街地景観を規定する規制手法の実態及び問題点を明らかにし、街並み誘導型地区計画による市街地景観形成手法を、市街地景観誘導方策のケーススタディを踏まえて、提案している。
- 3) 片野博、徳田光弘「福岡県における1・2級建築士事務所の業態と地域的差異 - 建築事務所の業態に関する研究 -」日本建築学会計画系論文集 第531号 pp.205-211 2000年5月
- 4) マンションの定義について、注釈5)の論文における「マンションという言葉は、昭和40年代に集合住宅が大衆化していく過程で定着していった俗語であり、主に分譲形式の中高層耐火造集合住宅を指すが、本稿では賃貸形式の中高層耐火造集合住宅も含んでいる。なお、この分類は筆者の判断によるもので、近年特に市街地に賃貸形式の中高層耐火造集合住宅が多数存在しており、「マンション」と呼べるに値する高級感も兼ね揃えており、さらに一般や設計者の認識の中にも賃貸活動が含まれていることによる。」を本稿でも流用する。
- 5) アンケート調査（ヒヤリング調査も踏まえている。）の結果に関して以下の論文に掲載されている。
徳田光弘、片野博「マンション外装デザインに対する意識調査 - 地場設計

事務所（福岡県内）のデザイン決定要因 -」日本建築学会計画系論文集 2000年9月、徳田光弘、片野博「マンション外装デザインに対する意識調査 - 地場型建築設計事務所のデザイン決定の実態 -」日本建築学会九州支部研究報告 第39号 2000年3月

6) アンケート調査で区分した他の外装部に関して、「ワンポイント的装飾」については、それに相当する部分が調査において不明確なため、「階段部」についてはアンケート調査により設計者のデザイン行為の対象外として扱われていることがわかり分析内容から省いた。また「色彩」について、外装仕上げにおいて吹付を主とするマンションのほとんどが改修工事などにより竣工時の色彩を止めておらず、竣工時から変化が見られない外装タイルの色彩に関するものだけを対象にした。

7) ファサードに関する研究として以下の論文などが上げられる。

小川次郎、安野彰、坂本一成「都市型中高層建築のファサードにおける形態構成 -ヴォリュームの複合から見た建築の構成形式に関する研究 (3) -」日本建築学会計画系論文集 第496号 pp.105-112 1997年6月/船越徹、積田洋「識別法によるファサードの特性に関する研究 -ファサードの研究 (その1) -」日本建築学会計画系論文集 第479号 pp.139-147 1996年1月/張奕文、近藤正一、早瀬幸彦、若山滋、松本直司「距離による高層建築ファサードの見えの変化に関する研究」日本建築学会計画系論文集 pp.143-149 1995年2月

8) 本研究の対象地である塩原地区について以下に概説する。

都心である天神から南東へ約4.5キロ、陸の玄関である博多駅から南に約3キロの位置にあり、南、西はおおむね主要地方道の福岡大牟田線に、北、東は那珂川に囲まれた地域である。この地区の発展は昭和47年に着手された「塩原地区区画整理事業」に収束され、昭和46年改定の第二次マスタープランで香椎地区・西新地区に並び副都心として開発が行われた。急行停車駅である西鉄大牟田線大橋駅が中心部に位置し、交通の要としての役割を果たすとともに、主要地方道福岡筑紫野線が通り、それに国道385号線が交差しており交通利便性に優れた地区である。なお、塩原地区に関する文献資料として「塩原地区区画整理誌 福岡市（昭和63年3月発行）」を参考にしている。

9) 参照した住宅地図を以下に記す。

「福岡市南区住宅案内図」東洋出版社発行、「全国统一地形図式航空写真航空住宅地図帳昭和53年版南区版」公共施設地図航空株式会社出版、「ゼンリン住宅地図」83,86,89,91,93,95 福岡市南区」株式会社ゼンリン

10) また、時代変化の要因を探るため設計者に対するヒヤリング調査を実施した。ヒヤリング調査は、対象を社団法人福岡県建築士事務所の協会の97年会員名簿に記載されている福岡市内の事務所を主とし、マンションを中心に設計活動を行っている事務所を紹介などによって抽出し調査を行っている。30件程度の回答が得られ、調査方法は、事務所へ赴き1時間程度の質疑応答の形式をとっている。調査内容は、本稿に記載する各外装部の時代変化グラフを用い、その要因などについて質問している。他に参考意見として、不動産業者、ディベロッパー業者に対しヒヤリング調査を行っている。

11) 「バルコニー躯体」について、「躯体」は「主として強度を受け持つ部分」（建築大辞典第2版）を指すが、本稿ではやや強引ではあるが「手摺部」との区分を明確にするため、バルコニー床面に対し、立ち上がり部分で主としてコンクリートによって造られた部分を指している。

12) 「曲面型」の増減傾向の事由に関して、ヒヤリング調査の結果において、具体的なコストの試算は不可能であったが、型枠代が特注でコスト増になる可能性が高いことがわかり、近年採用され難くなったこと主な要因として考えられる。

13) 他に各手摺形状におけるコストについて、具体的な数値を算出することは不明確な点も多く避けたが、「建設物価」、「建築コスト情報」（財団法人建設物価調査会発行）などの参考資料を踏まえ、設計者の助言（実践的な価格の認識を得るため）をもとに考察を試みている。例えば、手摺部をアルミ製縦格子にした場合（平米コスト、工事費含む）とコンクリート躯体を用いた場合（0.15立米として換算、外側タイル張り・内側吹付、工事費含む）では、およそコンクリートを用いた場合の方が1.5〜2倍程度のコスト増が見込まれるなど。

14) 吹付からタイルへの移行の要因の一つとして、維持管理の面からタイルの方がランニングコストを抑えることができる点があげられる。他にも、建築施工等の技術進歩が考えられ、例えば10〜20枚のタイルを一組とし、裏面にシートを配して壁面に張り付けるユニットタイル（シートタイル）の手法が定着してきたことにより、工期短縮、すなわちコスト削減につながるなどがタイルの使用増加の主な理由として考えられる。これらに関して、ヒヤリング調査の結果を参考にし、大手建材メーカー4社のタイルカタログを資料として用いている。

15) 実地調査でも、近年のマンションにおいて特に躯体の角部に役物を用いず吹付仕上げにしタイル総数を下げる手法が多く採用されていることが確認できた。

16) ここで「薄茶系色」とはベージュ系色を差し、ヒヤリング調査で明らかになった、近年設計者に通称「アースカラー」と呼ばれる色彩を指す。

17) 色彩の時代変化の要因についてヒヤリング調査の結果では、デザイン潮流による変化が主な要因ではなかろうかという回答、また「白色」の減少について汚れが目立つためという回答が得られた。

（2000年9月18日原稿受理、2001年5月22日採用決定）